

民話デジタル・アーカイブの可能性について

– On Digitizing Oral Tradition – Strategy, Practice, and Collaboration –

樋口 淳

Atsushi HIGUCHI

専修大学名誉教授 SENSHU University

E-mail: higuchi@isc.senshu-u.ac.jp

1. 民話の地域性と国際性

「民話」は *Folktale* の翻訳語で、「昔話」と同義です。*Folk* は *Folksong* の *Folk* と同じく「ふつうの人」のことですから、地域や時代を問わないきわめてグローバル (*Glocal*) な性格を持っています。たとえば「シンデレラ」を考えてみましょう。私たちがよく知っている「シンデレラ」はディズニーのアニメではないでしょうか？ このディズニー・ヴァージョンは、17世紀末にフランスの作家＝高級官僚のペローの書いた「昔話集」に収められています。しかしイタリアのバジレやドイツのグリムのヴァージョンもよく知られています。このことに興味を持ったイギリスのマリアン・コックスは 1897 年に世界中のシンデレラを集めて”*345 versions of Cinderella*” を公表しましたが、中には日本の「鉢かづき」も含まれています。しかし彼女は、おそらく世界で一番古い「シンデレラ」の記録である『西陽雜俎』(唐代)の「葉限」を知りませんでした。これに最初に気づいたのは日本の南方熊楠です。『西陽雜俎』には、もちろん妖精やカボチャの馬車やお城のパーティーは出てきません。妖精の代わりに継子を助けるのは魚で、魚が美しいドレスを出してくれて、着飾った娘は祭りに出かけて靴をなくします。その靴が決め手になって娘は王さまと結婚します。(ちなみに日本のシンデレラ「米福・栗福」では援助者は山姥で、靴は登場しせん。)

このように民話が言葉や国境や民族や時間の壁を楽々と越えてしまうのは、誰かが、何処かで語り始めた話を、糸電話のように次々に伝えていく「語り手と聞き手のネットワーク (伝承=*oral tradition*)」のおかげです。このネットワークは、アフリカを出発した人類がシリアあたりを経由して世界中に広がっていった不思議な歩みに似ています。そして人類がスカンジナビアで金髪碧眼に、アフリカでは黒い髪と黒い肌に、日本では黒い瞳とオリーブ色の肌にと、さまざま

の地域性を身につけたように、民話も地域ごとに姿を変えました。民話は、とにかく Global で Local なのです。

民話の *Glocal* な性格を示す、もう一つ分かりやすい例として「桃太郎」を考えてみましょう。

私たちがよく知っている「桃太郎」は、犬・猿・雉をつれて鬼退治をしますが、岡山の優れた語り手である賀島ヒサさんの「桃太郎」は怠け者で寝てばかりいます。そしてある日ムックリ起き上がって山に行き、大木を引き抜いて薪にして終わりです。鬼退治には行かないのです。岡山には、もちろん鬼退治に行く桃太郎もいます。しかしこの桃太郎はケチで、犬・猿・雉が黍団子を下さいと言うと「一つはやらん、半分やろう、供をせい」というのです。岡山には、ほかに犬・猿・雉の代わりに栗・蜂・石臼・牛の糞・くされ縄などがお供をして活躍する話もあります。「囲炉裏の栗がはじけて、蜂が鬼を刺し、牛の糞にすべった鬼の上にくされ縄で繋がれていた石臼が落ちて、鬼を退治する」というこの展開は、鬼を猿にかえれば「猿蟹合戦」と同じです。こうしてみると「桃太郎」の鬼退治は「猿蟹合戦」の仲間で、この「猿蟹合戦」の系譜をたどっていくと「犬と猫とロバとニワトリが泥棒を退治する」あの「ブレーメンの音楽隊」に至るとい研究者もいます。

「シンデレラ」も「桃太郎」も、スタンダード化されたヴァージョンがアニメや絵本や教科書などのメジャーなメディアによってグローバル化されると、ローカルな性格を剥ぎ取られてしまっていますが、実は地域によって、家によって、語り手によって無数のヴァージョンが存在する話です。

2. 地域の変容と民話の語りの変容

-失われる地域の暮らしと言葉、そして文化-

私は民俗学 (*Folklore*) 研究者で、1980 年代から各地で民話の聞き取り調査 (*Fieldwork*) を行ってきました。私にとって特に大切なフィールドは新潟県東頸城郡松代町と沖縄県大宜味村謝名城です。民話の聞き取り

をする時には、話だけではなく語り手の暮らしにまつわる全てを記録しようとしています。語り手が何処で何時生まれて、誰からどんな機会に話を聞いたかだけではなく、村や家族の暮らしにまつわるありとあらゆることを聞きます。たとえば雪国の場合には、夏と冬の生活の違いや、畑仕事、囲炉裏を囲む暮らしや、土間での夜なべ仕事、機織りや紙漉きの話、養蚕の話、子守りの話、出稼ぎの話、正月や節句の神祀りから食べ物の話、行商人や旅芸人の話などなど、語り手が疲れたり、飽きたりするまで途切れなく聞き続け、記録し続けます。こうすることで、はじめて話の背景や意味を理解することができたのです。

こういうタイプの聞き取り調査は民俗学の基本で、いまでも行われていますが、少なくとも民話の聞き取りに関しては大変難しくなっています。語り手と聞き手のライフスタイルや人間関係が大きく変わってしまったために、話の背景や言葉が伝わらなくなってしまったのです。たとえば私のフィールドである松代町は鉄道が敷かれ、道路が整備され、市町村合併で十日町市に編入され、専業農家が次々と姿を消しました。家の構造もかわり、囲炉裏や土間がなくなっただけでなく、板戸や襖、さらには布団もなくなり、個室でベッドの生活が主流になります。食事もコンビニやスーパーで総菜を買うことが増え、夜と昼の区別が希薄になり、お化けや妖怪もアニメやゲームの世界に住み換ええます。

こういう環境のなかで、語り手が聞き手である子どもに「お爺さんは山にシバカリに、お婆さんは川に洗濯に」と語っても、子どもには「なぜお婆さんが家の洗濯機を使わないのか、お爺さんはなぜ山のゴルフ場に芝を刈りに行くのか」分からないので、話はどうしても説明的になり、語り手は話の本筋に入る前にギブアップということになります。

もちろん、こうした生活環境やライフスタイルの変化は、いまに始まったことではなく、たとえば黒船や明治維新のように、私たちはこれまでも多くの変化を経験しています。そして民話は、その都度、暮らしに即した、さまざまなメッセージを包み込んで来ました。

たとえば「タクシー幽霊」という話があります。これは「雨の日にタクシーが女性を乗せて墓地に運んだら、それが幽霊だった」というよく聞かれる話ですが、江戸時代にはこの話の乗り物は駕籠でした。明治時代には、狸や狐が汽車に化けたという話が流行りました。これらは単純な話ですが、それでも死者の魂や身近なケモノの変身の力など、不思議な世界に関する信仰や目に見えぬモノとヒトの交流が話の基礎にあります。これが「シンデレラ」や「桃太郎」の語りであ

れば、語り手と聞き手の間には、さらに複雑な家族関係や不思議な妖精の力や幸せな結婚や、桃が流れてくる川上や鬼ヶ島という異界や、犬・猿・雉のような動物の援助など、さまざまな信仰や憧れや人間関係が語られることとなります。

民俗学は、こうした民話の世界の複雑なメッセージが、語り手と聞き手の間に共有された「世界観」に支えられていると考えます。そしてこの世界観は、いま現在の私たちだけのものではなく、長い時間と空間の旅を重ねてきた無数の語り手と聞き手に共有される「語りの世界観」であると考えます。

この地域や家庭の暮らしや言葉と世界観の問題は、最初に語り手とその暮らしに関心をもって民話を記録したドイツのグリムや日本の柳田國男の記録に、すでに明確なかたちで登場します。たとえば柳田國男は『遠野物語』の序文で「国内の山村にして遠野より更に物深き所には又無数の山神山人の伝説あるべし。願わくは之を語りて平地人を戦慄せしめよ」と書いています。柳田はここで、「山」の暮らしを忘れかけた平地人（＝都会人）に、自然の力に対する怖れや敬意を失うなど呼びかけているのだと思います。この警告が、地球という自然の恵みや脅威を忘れかけた現在の私たちに通底する普遍的なメッセージであることは、言うまでもありません。

自然との共生という「世界観」は、現在では、宇宙科学者にも自然史家にも歴史学者にも政治家にも運動家にも企業家にも、「エコロジー」というかたちで普遍的に共有されていますが、民話の記録者はこのような視点で自然と文化の共生を考えてきたのだと思います。

3. 民話の語りをデジタル保存しアーカイブ化する

私は、こういう大きな問題を最初から意識したわけではありませんが、2001年4月から日本学術振興会の助成を受けて民話の調査記録、とくに音声による記録をデジタル保存し、データベース化するという作業を続けてきました。途中、助成が途切れ、停滞したこともありましたが、これまでに63500件程度のデータを整理し、今年も13年目の支援を受けることができました。

私が特に音声データに拘ってこの仕事を始めたのは、きわめて日本的な事情があったからです。1960年代からテープレコーダーが普及し、誰もが手軽に音声の記録ができるようになると、日本の民話研究者は音声による語りの記録を競うようになります。民話は、それ以前にも文字によって記録されてきましたが、文字による記録は公開に印刷の手間と費用がかかり、数が限られました。音声記録の場合も、最初は機材も記録媒体のテープも高価でしたが、ウォークマンの登場

などによって誰もが利用可能な記録装置になりました。この機材の普及によって、日本は世界でも稀な、質の高い民話の音声記録の蓄積をもつようになったのです。これは、たいへん幸いなことで、世界のどこでも実行されたことではない、日本独自の蓄積です。

もちろん、この類まれな記録の量と質を支えたのは、機材の力だけではありません。民話を記録しようとする日本の調査・研究者の層の厚さが、世界に抜きん出ていたことが、この成果を生み出したのだと思います。

民話の調査研究は、世界的にみると大学などの研究機関か、行政機関が行うことが多いと思います。たとえばお隣の韓国には、韓国精神文化研究院とその後身である韓国学中央研究院の行った全国規模の記録があり、ネット上に公開されていますが、それ以外の個人が行った調査は多くありません。これに対して日本の調査記録は、大半が個人のもので、もちろん個々の研究者が大学等の研究機関に所属していることもあります。調査チームの組織や資金の調達、ほとんど個人の資格で行われ、その結果、成果の公表も個人の資格でおこなわれるのが一般です。この個人の資格で行われた調査と、その成果の蓄積が、おそらく世界に類のない質と量となっているのだと思います。私の推計では、少なくとも30万件ほどのデータが、潜在的に累積されているものと思われます。

しかしここで、誰でも気がつくことですが、いくつかの問題が起きます。一つは調査に使用されたアナログテープには寿命があり、いつかはこの記録が消えてしまうということです。しかも民話の語りをとりまく環境が変わり、伝統的な語りの方が失われ、再び同様の調査を行うことは、不可能に近いのです。二つ目は、テープの記録は個人に帰属するので、これをまとめて組織的に管理するのが難しいということです。実は、語り手だけではなく調査者も高齢化し、個人でテープを管理することが困難になっています。三つ目は、たとえ調査者が、公共の博物館や資料館に管理を移管しても、テープの記録方法や整理には研究者個々の工夫があり、移管された資料の整理は容易ではありません。これに対応できる施設や学芸員は少ないので、資料が資料館の片隅に放置されて劣化する危険性があります。

こうした状況のなかで、私が最初に手がけたのは、仲間を募ってデータベース作成委員会を立ち上げ、各地の研究者に呼びかけて民話調査のアナログテープを借り出し、それをデジタル化してCD-ROMに収めて一部をテープとともに返却し、一部を管理保存するということです。2001年の時点では個人のコンピュータの容量は少なく処理能力も低かったのですが、それでも大変な作業でした。

その後、コンピュータの性能は加速度的に進化し、音声データの処理やハードディスクによる管理が、誰にでも手軽にできるようになりました。この進化によって、私たちはアナログデータの保存だけではなく、ファイルメーカーを利用して、約30項目から検索可能なデータベースの作成に着手することができました。

この作業を中心的に担ってくれたのは日本民話の会事務局長の岩倉千春さんです。アナログ音声データは、デジタル化の過程で、語りや語り手に関する情報をエクセルによって記録していたので、ファイルメーカーへの移行は比較的スムーズでした。この移行によって民話のデジタル保存は、データベースに進化し、さらにはデジタルアーカイブ化の一步を踏み出したと思います。(ここで、みなさんに民話データベースの実際を紹介してみたいと思います。)

4. デジタルアーカイブの問題点と可能性

以上のような民話のデジタルデータベース化の経験を踏まえて、私は、2015年10月11日、12日の2日間にわたって北京の中国社会科学院で開催されたCASS Forum(2015 Literature) — Digitizing Oral Tradition: Strategy, Practice, and Collaboration —に参加し、その現状と展望を報告しました。

このフォーラムには、フィンランド、ドイツ、アメリカ、そして中国各地で活動する民俗学の研究者が参加し、彼らの運営するデジタルアーカイブを紹介しましたが、それはたいへん見事で、私が紹介した試みは、展示や予算の規模から考えると、たいへん見劣りするものでした。

各国のデジタルアーカイブは、所蔵する貴重な音声や映像の資料を、独自に開発したソフトウェアを利用して分かり易く公開しています。そこには、今後、日本の民俗や民族の博物館が参考にすべき多くのアイデアや技術が含まれていると思います。

ただ、そこで問題となるのは、国際協力や国際比較という視点の欠如です。たいへん皮肉なことですが、各アーカイブが独自の展示技術開発を進めれば進めるほど、その展示は「世界で一つ(unique au monde)」のものになってしまいます。アーカイブが所蔵資料を囲い込み、データの汎用性が失われ、それぞれの資料が島のように孤立してしまう可能性があるのです。

これに対して、シンポジウムで私が紹介した貧しいデジタルアーカイブは、これとはまったく逆の性格を備えています。私たちの民話データベースは、音声データをMP3に圧縮してしまうと、わずか50G程度の容量しかないので、市販の64GのUSB一本に入れて、どこにでも携帯することができます。

このアーカイブには、現在のところ日本・韓国・中国の民話データが収められていますが、まだ日本語と韓国語でしか資料検索はできません。しかし多言語対応なので、将来的には世界中のほとんどすべての口承文芸資料をここに格納し、ほとんどすべての言語での検索が可能になります。これは、アーカイブがファイルメーカーというごく一般的な汎用ソフトで設計されているため、フィンランドやドイツやアメリカや

中国と、明日にでも資料交換し、共同アーカイブ・プロジェクトを立ち上げることが可能です。

さらに、出来上がった多言語の国際共同アーカイブは、いつでも分離・合体可能なので、それぞれの国の研究者が、それぞれの口承文芸研究に特化して使用することもできますし、フィンランドとアメリカとか、ドイツと中国というような二国間の組み合わせも可能です。また、たとえばフィンランド、ドイツ、アメリカ、中国、日本という5つの国の5つの言語のアーカイブに、たとえばフランスやインドネシアやエジプトが新規参入することも随時可能です。

こうした提案は、まったくの夢物語で、非現実的と思われるかもしれませんが、デジタルの資料は、注意深く管理すれば世代を越えて生き残ります。また技術も加速度的に進化します。クラウド・データの利用が加速し、多言語間の自動翻訳が近い将来一般になるという現実を踏まえれば、この提案は、実は「夢」でも「非現実」でもなく、ごく現実的な、あたりまえの提案なのです。

5. インターネット上の小さなアーカイブ

とはいえ、これは「やる気」がなければ出来ないことで、

当面はみなさん自国の自分の博物館のデジタルアーカイブ化で一杯だと思いま

す。そこで、とりあえず、私たちが「民話データベース」を基礎として、貧しい予算で運営するネット上のデジタルアーカイブについて紹介したいと思います。それは「東アジア民話データベース」というページです。

(<http://minwadata.fm.senshu-u.ac.jp/EastAsiaMinwaDB/IndexEAMinwaDB.html>)

このページの、たとえば「日本各地の伝承の民話を聞いてみよう」をクリックすると日本地図のページが現れて、地図から県名を選択すると当該県の語り手の話を聞くことができます。同様に「福島県飯舘村の語り」を聞いてみよう」をクリックすると



飯舘村の地図ページに移動し、村の地名から地域にまつわる話を聞くことができます。これは、言うまでもなく、村を離れた村の人たちにかつて分かち合った日常の暮らしの記憶を届ける為に用意されたページです。

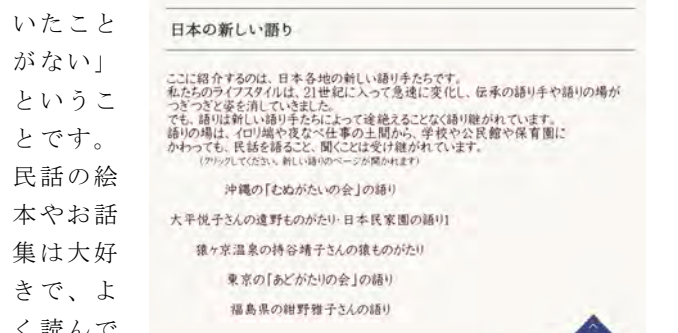
6. 伝統を継承し、新しい語りを支援する

このホームページの目的は幾つかありますが、一番大切なのは、いま各地に生まれつつある「新しい語り手」を支援することです。すでにお話したように、21世紀に入りグローバル化と情報ネットワークが爆発的に拡大した為に、ライフスタイルが変わり、伝承の語りは「語り場と時」を失い「絶滅の危機」に瀕しています。

しかし、周知のように、この危機に直面して、地域に根ざした伝統を継承して「新しい語り」を根付かせようとする「新しい語り手」が次々に現れています。

こうした新しい語り手が語るの、もはや囲炉裏端や土間や寝床ではなく、学校や公民館や保育所や老人ホームです。聞き手も、日常生活をともにする孫や子どもではなく、初めて会う生徒や園児や老人です。このような「新しい環境」の中で語るには、伝承の語り手とは違った新しい語りの技術（ワザ）が必要になります。

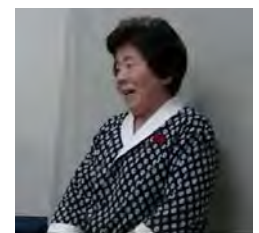
この「新しい語り手」たちの多くが最初に直面する問題は、「民話を語ってみたいが、子どもの頃に伝承の語り」を聞いたことがない」ということです。



勉強もしているけれど、身近に伝承の語り手がいなくても、どう語っていいかという不安が残るのです。

そこで、このホームページでは「日本の新しい語り」というページを設け、ビデオを利用してすでに経験をつんだ、各地の「新しい語り手」を紹介しています。

例えば、福島県の紺野雅子さんは、子どもの頃から沢山の話を聞いて育った見事な語り手ですが、道の駅や老人ホームなどで見ず知らずの「一見さん」に語る事が多いので、やはり「新しい語り手」だと言えるでしょう。



このページの語りはスマートフォンやタブレットで見るのに都合よくできていますから、好きなところで好きな時間に聞くことができます。寝床や土間ではありませんが、かなり身近な語りとなり、新しい語り手たちの手本になってくれるでしょう。

新しい語り手に対するもう一つの支援は、「日本民話の聞き比べ」のページです。このページで、例えば桃太郎のアイコンをクリックすると、日本各地の5人の優れた語り手の桃太郎を音声で聞くことができます。ここで語られる桃太郎は、絵本やお話集で読んだ桃太郎とはちょっと

違います。それぞれの地域の言葉で語られた、それぞれの「世界観」に支えられた「暮らしの中の桃太郎」なのです。

私たちが新しい語り手に期待するのは、一言でいえば「ステレオタイプから抜け出して、自分の言葉で自分の話を語ること」です。新しい語り手が絵本やお話集という教科書を離れて、伝承の語り手たちの語りの言葉やリズムの面白さや、闊達で自由な展開に触れて、生きた語りを学ぶことが期待されます。



7. まとめ

アナログ音声データのデジタル保存管理から、データベースに、そして小さなデジタルアーカイブへと形を変えつつある私たちの仕事は、現在は63500件ほどのデータを基礎としていますが、本年度中には70000件ほどに進化します。この多言語でユビキタスなデータは、語り伝えられた言葉と物語の文化遺産です。それは地域の文化を未来に伝えるだけでなく、世界に向かって開かれ、一見異なる言葉や文化や世界観の奥に潜む基層を明らかにします。そしてそれは、研究・教育の場面のみにとどまるものではなく、観光などの地域振興のために役立つ実用的なツールでもあります。

私たちは、この資産をできるだけ多くの人に無償で提供し、地域コミュニティ活動と異文化交流に寄与したいと考えています。

文 献

- [1] 樋口淳 “口頭伝承のデータベース化” 専修大学人文論集, 98号, pp163-192, March 2016.
- [2] 樋口淳 “東亜口頭伝承デジタル化之策略” 民間文化論壇, 235号, pp. 12-17, Dec. 2015.

- [3] 樋口淳 “民話データベースの課題と可能性” 口承文芸研究, 35号, pp16-33, March 2012.
- [4] 樋口淳, 民話の森の歩きかた, 春風社, 横浜, 2011.